

斜里沖の石炭が語る知床の4,000万年前

大野孝明さん（青葉町3-2）から止別沖水深30～37・でホタテ桁網に採取された石炭や花崗岩礫の資料の寄贈が5年前にありました。当時、石炭については石炭船が沈没したのでは？サハリンの炭田が流水で流されてきたのでは？と考えていましたが、最近の地質データによると、どうも斜里沖に約4,000万年前の浦幌層群の石炭（釧路炭田も浦幌層群に入ります）が分布しているらしいのです。現在知床半島で確認されている一番古い岩石は860万年前の火山岩ですから、もし浦幌層群の石炭だと一気に3,000年以上古い地層の登場になります。

では4,000万年前の道東地域はどのような地質環境だったのでしょうか。5,000万年まで堆積が続いた根室層群（一部にアンモナイトが産する。放射状の車石は有名）が東西方向の堆積盆（泥岩などの堆積岩が形成される窪地）を作っていました。西には海山の常呂帯があり、そのさらに西には神居古潭岩が一部陸化していました。常呂帯と神居古潭帯の間は深海の堆積層の日高累層群が西から東へと堆積年代が若くなりながら8,000万年から6,000万の地層が分布しています（図1）。以上のデータは多くの研究者に周知のデータですが、最近神居古潭帯の西から東へと5,000万年から4,000万年にかけて沈み込み運動があったのではという高圧鉱物とその絶対年代が示されつつあります。（図2）。図のように前弧海盆と背弧海盆の沈降域が生まれ、

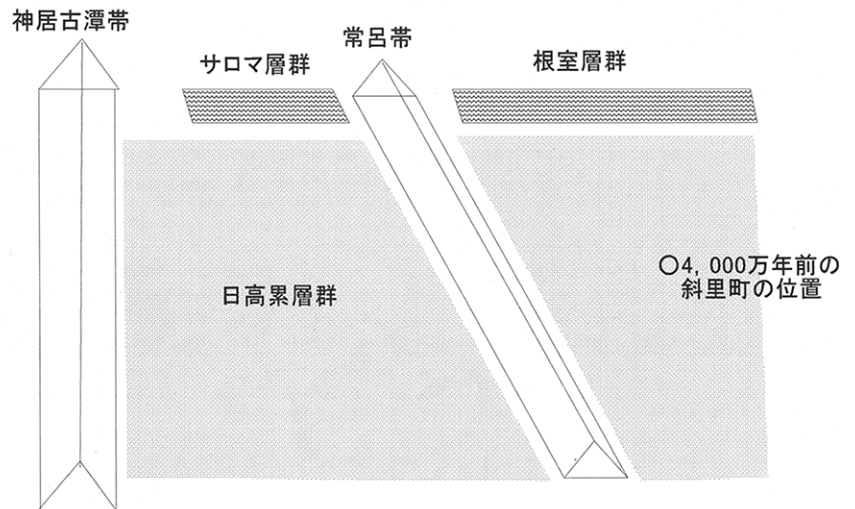


図1 道東地域における地層の水平分布（4,000万年前）

その間では火成作用（この場合、日高帯の花崗岩）があり、陸化します。陸化についてですが、当時、神居古潭帯では北西方向に、サハリンのススナイ変成帯では南東方向に圧縮されていたようで、南北から挟まれた圧縮状態が陸化に拍車をかけていたと思われる。そのため神居古潭帯に近い遠軽、紋別地域では2,000万年前まで陸地が続きます。背弧海

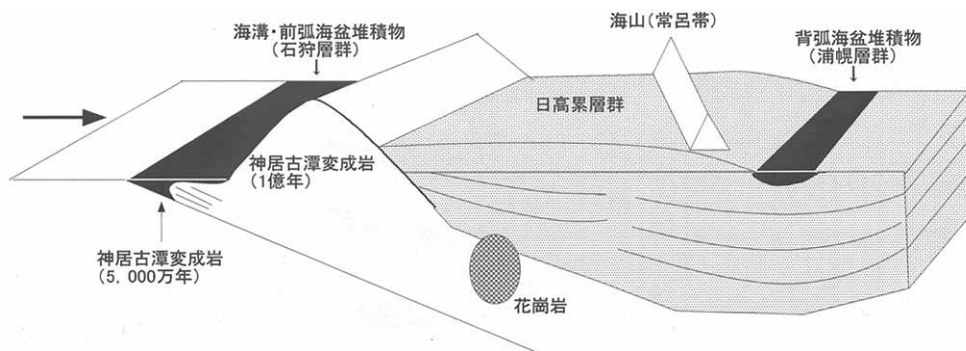


図2 4,000万年前の西からの沈み込み運動による道東地域の地層の形成

盆の堆積層の浦幌層群では淡水から汽水を経て海水へと変化しています。

最近の本にも北見大和堆に、古第三紀層（6,500～2,300万年前）が分布していることを示す図が載せられています（図3）。斜里沖にも十分4,000万年前の地層が分布している可能性があります。

補足になりますが、前弧海盆と背弧海盆は時代とともに順次西へと移動しています。そして2,000万年前頃に神居古潭からの圧縮が弱まり、全体に沈降し、海成層が道東全域に分布するようになります。これまで道東の形成史について多くの疑問点がありましたが、以上のモデルを考えると多くの地質現象が説明されます。斜里の地下を深く掘り進むと石炭層が出てくるかもしれません。（合地信生）

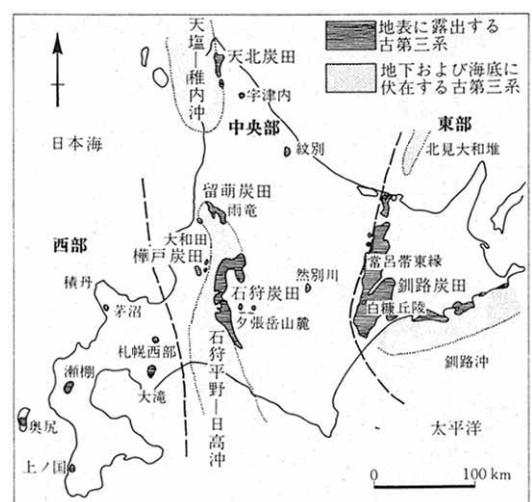


図3 北海道および周辺海域の古第三系の分布図

最近、博物館周辺で鹿を見かけます。先日も遊歩道から、駐車場へ向けて猛スピードで走り去る鹿を見かけました。博物館へ来る際は車のスピードを緩め、鹿の飛び出しに気をつけて下さいね。（秋山）

発行 斜里町立知床博物館協力会 2004.8.1
099-4113
北海道斜里郡斜里町本町49 斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257
<http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/>